

〔寄稿〕

安達泰盛とその兄弟

川 添 昭 二

日蓮遺文には安達（城）泰盛について、次のように二ヶ所に所見がある。

大がくと申人は、ふつうの人にはにず、日蓮が御かんきの時身をすてかたうどして候し人なり、此仰は城殿の御計なり、城殿と大がく殿は知音にてをはし候、其故は大がく殿は坂東第一の御てかき、城介殿は御てをこのまるる人也、（弘安元年「大学三郎御書」、定遺一六一九頁）

一定として平等も城等もいかりて此一門をさんさんとなす事も出来せば、眼をひさいで観念せよ、（弘安二年十月一日「聖人御難事」、定遺一六七四頁）

安達泰盛が得宗被官の上首平頼綱と並んで北条時宗政権の最有力者であり、日蓮の宗教活動に有形無形の影響を与えていることが知られる。筆者は日蓮研究を深化する方法の一つとして、同時代鎌倉政治史研究の援用が不可欠であると考えているが、その意味からも、安達泰盛についての理解は必要である。紙数制限に合わせ、ここでは安達泰盛の妹が北条時宗と結婚する弘長元年（一二六一）を目安に、それまでの安達泰盛の事績を中心に、その兄弟の事績を

安達泰盛とその兄弟（川添）

安達泰盛とその兄弟(川添)

併叙して、鎌倉政治史の一素材を提示し、日蓮研究に備えてみたい。

弘長元年(一二六一)四月二十三日、十一歳の北条時宗は、安達義景の娘⁽¹⁾で十歳の堀内殿と結婚した。堀内殿は、建長四年(一二五二)七月四日、義景四十三歳(卒去の前年)のときの生誕である。堀内殿が北条時宗に嫁したときは父義景の没後であり、安達氏の惣領で二十二歳年上の泰盛が親代りて世話をしたと思われる。堀内殿は北条時宗の正室で、貞時の母である。潮音院と号し、松岡殿といわれ、駈入寺(縁切寺)として知られる鎌倉東慶寺の開基である。徳治元年(一二〇六)十月九日没、法名は覚山志道尼である。堀内殿が北条時宗の正妻になったことは、何よりも安達氏(泰盛)の政治的地歩を固めることに役立った。以下、安達泰盛を中心に、その兄弟についてふれていこう。

安達泰盛の曾祖父藤九郎盛長は源頼朝の幕府創業を助けた功臣である。祖父景盛・父義景は執権政治の確立に力を致し、宝治合戦では北条時頼の三浦氏に対する巧みな攪乱・挑発を背景にしながら、三浦氏打倒の正面に立ち、時頼の権力確立を助け、自家勢力を躍進させた。安達氏は建保六年(一二一八)景盛が武門の名替とする秋田城介⁽³⁾になって以来、義景・泰盛と正嫡は秋田城介になった。安達氏は、評定衆・引付衆など幕府の重要政務の担当を通じて勢力を蓄えたが、盛長以来四代にわたり上野守護としてその勢力を強固なものにした。上野以外の守護としては、盛長のときの三河、景盛のときの摂津、泰盛のときの肥後⁽⁴⁾がある。安達氏の勢力が強固なものになった理由として逸することのできないのは、他氏との婚姻関係である。まず、北条氏得宗及び北条氏一門との婚姻があげられる。義景の妹松下禪尼が北条泰時の嫡男時氏に嫁して経時・時頼らを生んでいることはよく知られている。義景の子息顯盛の妻は北条政村の娘である。その他、後述のように、小笠原氏・宇都宮氏・武藤氏・二階堂氏など、有力御家人・幕府法曹吏僚系武士との婚姻関係が知られる。⁽⁵⁾

義景は建長五年（一二五三）六月三日、四十四歳で没するが、その子女は多く、泰盛段階で飛躍的に勢力を拡大した大きな理由をなしている。『尊卑分脈』が義景の子女としてあげているのは、頼景・景村・泰盛・時盛・重景・頭盛・長景・時景の八人の子息と女子三人の計十一人である。女子は大江宗秀の母（時秀の妻）、宇都宮景綱の妻、北条時宗の妻となっている。時宗の妻になった女子以外は、その事績は不詳である。

次郎頼景は正応五年（一二九二）正月九日六十四歳で没しているから、逆算すると寛喜元年（一二二九）義景二十歳のときの生まれになる。泰盛より二歳年上である。『吾妻鏡』では城次郎と記されており、『尊卑分脈』は関戸次郎と号したとしている。『吾妻鏡』では仁治二年（一二四一）正月二十三日条に城次郎の名で笠懸の射手として見えるのが初見である。ときに十三歳。元服後間もなくのことであろう。以下、計四十七ヶ所⁶ほどの所見がある。多くは供奉関係である。弘長三年（一二六三）十一月二十二日条の出家の記事が最後である。しばしば、笠懸・犬追物・流鏑馬などの射手をしており、射芸に長じていたことが知られる。建長二年（一二五〇）十二月二十七日近習結番三番、同四年四月三日格子番一番、同年十一月十二日間見参結番三番など、他の安達氏の子息同様將軍近仕の役をつとめている。正嘉元年（一二五七）十一月二十三日、北条実時の息男（時方、後の頭時）の元服に理髪役をしており安達氏と金沢氏の親密な関係の一端が知られる。頭時が弘安八年の霜月騒動に連座して下総埴生庄に籠居させられたのも安達氏と親しかったからである。

建長四年（一二五二）四月、宗尊親王が無事鎌倉入りをしたことを奏聞する使者として上洛。翌五年十二月、泰盛と一緒に引付衆になり、正嘉元年（一二五七）三月丹後守に任じ、叙爵している。幕府に一応重要な役割を果たしているが、弘長三年（一二六三）六月に、同じ引付衆の後藤基政とともに六波羅の評定衆になって上洛しており、幕政

安達泰盛とその兄弟（川添）

中枢からは外れている。安達氏興廃の命運をかけた宝治合戦は、景盛の督励下に義景・泰盛父子が中心となって活動しており、頼景は脇役であつたらしい。六波羅評定衆への転出も、安達氏の勢力拡充からいえば、幕府の重要な出先機関に外援の勢力を配置したことになるけれども、頼景は惣領泰盛の兄であり、鎌倉にあっては微妙な問題があつたろう。北条時宗と庶兄時輔との、執権と六波羅探題との関係の、まさに縮少版である。弘長三年十一月、北条時頼の卒去にともなつて弟の時盛らとともに出家し、法名を道智と号した。このことから推察すると、頼景の頼の字は時頼から与えられていたのかもしれない。六波羅評定衆に転じたあと、同じような運命を辿っている探題の北条時輔と親しくなつたのは当然で、文永九年（一二二二）時輔が誅殺される二月騒動に連座して関東に召し下され、所帯二ヶ所を収公されている。『帝王編年記』卷廿六弘安八年（一二八五）十一月十七日条によれば、霜月騒動で安達泰盛一門が誅された折、泰盛舎弟丹後守頼景道智は泰盛に与せず災を遁れた、とある。安達氏存亡の折、頼景は太宗の泰盛に協力しなかつたのである。頼景が反泰盛の姿勢を持続していたのは明らかであり、北条時宗体制に対しても批判的であつたろうことが推測される。なお、『大体和尚法語』に城丹後右衛門なる人物が見えるが、頼景の子息右衛門尉長宗であらう。

次の景村は城三郎と呼ばれ、『尊卑分脈』には大室三郎と記されている。年齢は不詳。『吾妻鏡』には八ヶ所ほどの所見がある。将軍頼朝が由比の浦に犬追物を寛た建長二年（一二五〇）八月十八日の供奉者の中に三郎の名が始めて見える。このとき頼景は二十二歳、泰盛は二十歳であるから、二十一歳ぐらいが目安にならう。『吾妻鏡』の記事は、ほとんど供奉の記事である。建長二年十二月二十七日、將軍の近習結番のうち五番に配されていることぐらいが特記すべきことである。正嘉二年（一二五八）六月十七日、鶴岡放生会供奉人のなかに見えるのを最後として、以後

『吾妻鏡』中にその名は見出せない。

三番目に記載されている九郎泰盛は、北条時宗の時代を理解するための鍵になる最重要人物である。ここでは時宗結婚の弘長元年（一二六一）ごろまでの動きを追っておこう。まず生没年の確定が必要である。その手掛りになるのは、多賀宗隼氏が早く指摘されている『関東評定伝』弘安四年条である。同年二月、泰盛の子息宗景が引付衆に加わったときの記事で、「于_レ時二十三歳、父（泰盛）例」とある。つまり泰盛が建長五年（一二五三）引付衆になったのは二十三歳だったというのである。それを基準にして生年を逆算すると、泰盛は寛喜三年（一二三一）の生まれということになる。弘安八年（一二八五）霜月騒動で平頼綱から誅殺されたときは五十五歳であった。『尊卑分脈』によると母は小笠原六郎源時長の娘である。小笠原氏は甲斐源氏の流れである。時長は長清の子で伴野六郎と称し、安達氏歴代の地盤である上野に程近い信濃国佐久郡伴野庄の地頭である。同庄は中世信濃ではもっとも広大・肥沃な水田地帯であった。⁽¹⁾時長の孫長泰をはじめ信濃伴野氏の本系が霜月騒動で泰盛に味方して多く討死しているのは、右のような事情による。

安達泰盛の幼年時代は北条泰時によって執権政治が確立される時代であり、二十代の前半ごろまでは時頼による執権政治の整備の時代である。この間、笠懸・犬追物などの射手として、しばしばすぐれた射芸の力量を示している。馬術にすぐれていたことは『徒然草』第百八十五段でよく知られている。御鞠奉行などもつとめ鞠にも堪能であった。番帳の清書などをしていて書にすぐれていたことが知られる。日蓮の遺文「大学三郎御書」には「城介殿は御てをこのまるる人也」（前引）とあって、泰盛が、書道の名手で日蓮の信徒である大学三郎を敬愛していたことを伝えている。建長二年（一二五〇）十二月二十七日には將軍近習の結番一番であり、建長四年（一二五二）四月三日には

安達泰盛とその兄弟(川添)

格子番五番、正嘉元年(一二五七)十二月二十四日には、仙洞の義に准じた將軍の廂衆の六番、文応元年(一二六〇)二月二十日には同三番、同年正月二十日には昼番衆の一番である。関東の有力御家人の多くがつとめていることではあるが、泰盛の將軍近侍の度合は他の有力御家人に比べて、やはり高い。それだけに、將軍という存在に対する御家人としての求心性は強かったとみられる。

安達泰盛について肝心なことは、安達氏一門のなかでどういう位置を占めていたのか、ということである。それを知る手掛りになるのは、泰盛が『吾妻鏡』に初めて見える、寛元二年(一二四四)六月十七日、十四歳の折の記事である。これは泰盛が、上野国役としての京都大番役勤仕の番頭であったことが知られる記事である。当時の上野守護は父の義景である。泰盛は番頭として上野の御家人を率いて京都大番役の催促・勤仕にあたっていた。父の代官として安達氏を代表した格での勤務である。すでに安達氏の惣領後継者に擬せられていたとみて差しつかえあるまい。

建長五年(一二五三)十二月、泰盛は兄の次郎頼景とともに引付衆になるが、康元元年(一二五六)四月には二階堂行泰のあとをうけて五番引付頭になっている。これはもともと行泰が安達義景のあとをうけて就任していたもので、泰盛は父のあとをついだことになる。さらに同年六月には評定衆となるが、頼景は引付衆のまま、幕府政治における泰盛と頼景の差は明瞭である。頼景が後に六波羅評定衆に転ずるのも、泰盛の意向によるものであろう。この差が出てきたのは、実は泰盛が安達氏の家督を継いだからである。義景が建長五年六月三日卒去したあと、建長六年十二月、泰盛は安達氏の正嫡の標識とも言うべき秋田城介に任ぜられている。このあと、文永元年(一二六四)六月に三番引付頭となり、同年十月に越訴奉行となるなど、要職を重ねてゆく。

正嘉元年二月二十六日の北条時宗元服の折には烏帽子持参の役をつとめている。時宗より二十一年の年長である。

時宗の後見役的な傾向はこれでいっそう強まった。『保曆間記』などは、泰盛を時宗の舅だったから並ぶ人も無かったと記している。事実上は時宗は泰盛の妹婿で義弟になるのであるが、泰盛と堀内殿とは兄妹と言うより親子のような関係であった。堀内殿が泰盛の猶子ではなかったかという推測も残しておいてよいように思う。泰盛は一門の惣領として二十二歳年下の妹を愛育していた。松下禅尼の存在は、おそらく堀内殿を時宗の妻にする方向を強めたことであらう。堀内殿の結婚が、安達氏惣領泰盛と北条時頼の合意の上に成立したものであることは言うまでもあるまい。安達泰盛の選択に、北条時宗が得宗後継者であるからとの評価があったことは、これまた言うまでもあるまい。⁽¹²⁾

四郎時盛の略伝は『関東評定伝』建治二年条にみえる。それによると弘安八年（一二八五）六月十日高野山で四十五年の生涯を終えている。逆算すれば仁治二年（一二四一）義景三十二歳のときの生まれで、泰盛より十歳年下である。『吾妻鏡』には三十三ヶ所ほど所見があり、建長二年元旦年始の儀に泰盛とともに同四郎時盛として見えるのが同書を含めた史料上の初見である。以下、同書ではほとんど供奉の記事である。それも泰盛と一緒に供奉している例が多い。他では正嘉元年十二月二十四日、文応元年二月二十日、陌衆として見えること、文応元年正月二十日昼番衆として見えることがやや注目をひく程度である。犬追物・御鞠奉行などをしているから、射芸・蹴鞠には巧みであったことが知られる。ことに詠歌にはすぐれていた。⁽¹³⁾

弘長三年（一二六三）十一月二十二日、北条時頼の卒去にともない、二十三歳で兄頼景とともに出家し、法名を爐忍と号した。このことからすると、兄の頼景と同じく時の字はあるいは時頼から与えられていたものかもしれない。法名は後に道供（道洪）⁽¹⁴⁾と改めている。この出家の記事以後、『吾妻鏡』に所見はない。『外記日記』によると、文永三年（一二六六）七月二十一日、二階堂行忠（法名行一）とともに関東の使者として上洛している。もちろん、将

安達泰盛とその兄弟（川派）

軍宗尊親王が將軍職を廃されたことに関するものである。出家はしても重要政務に携わっていたのである。文永四年十一月には関東評定衆になっている。ところが、建治二年（一二七六）九月、遁世してひそかに鎌倉の寿福寺に入り、同月十五日所帯を悉く収公されている。一門から義絶されたのはこのときであろう。時盛の「遁世」が少なくとも一門的な行為でなかったことは確かであろう。北条義政の遁世とも関係があるように思われる。時盛が卒去したとき、義絶の故に相模国司後室（堀内殿）・泰盛以下の兄弟は喪に服しなかった、と『関東評定伝』は伝えている。『尊卑分脈』によると、時盛の子息時長は「母出羽守行義女」とあり、二階堂系図とも合致する。評定衆二階堂行義は文永五年（一二六八）閏正月二十五日六十六歳で卒している。なお、時長は弘安八年霜月騒動のおり自害している。

五郎重景は、建長四年（一二五二）四月三日、城五郎重景として格子番一番に見えるのを初めとして、弘長元年（一二六一）八月五日城五郎左衛門尉として供奉の障りを申した記事に至るまで、『吾妻鏡』に十二ヶ所見える。母も年齢も不詳。初見の建長四年にはすでに元服をしているのであるから、かりに十歳ぐらいだとすると四郎時盛より少し年下である。正嘉元年（一二五七）十二月二十九日の格子番四番では城五郎重景とあり、翌年元旦には城五郎左衛門尉とある。以下の所見にはすべて左衛門尉の官途がつけられている。『吾妻鏡』では、格子番・廂衆の記事以外は、多く供奉の記事である。後に出家して、弘安八年の霜月騒動で誅殺されている。

六郎頭盛については『関東評定伝』弘安三年条に略伝が見える。弘安三年（一二八〇）二月八日、三十六歳で没しているから、寛元三年（一二四五）の生まれになる。母は入道大納言家中納言とするが、『尊卑分脈』の頭盛の箇所には「母雅経卿女城尼」とある。同書の飛鳥井雅経の女子に城介義景の妻が見える。雑経は『新古今集』の撰者として著名な歌人であり蹴鞠飛鳥井一流の祖である。関東との縁が深く、源実朝と藤原定家との間を仲介し、鴨長明の鎌

倉下向を斡旋したりしている。雅経以来、その子教定・孫雅有は関東祇候の廷臣であり、安達氏一門が蹴鞠・詠歌に秀でていたのは飛鳥井家との縁によるが多かるう。頭盛も詠歌には相応の力量を有していた。⁽¹⁵⁾

『吾妻鏡』には三十三ヶ所に安達頭盛の名が見える。正嘉元年（一二五七）元且が初見で、文永二年（一二六五）七月十六日が最後である。記事のほとんどは供奉関係で、兄たちと同様、廂衆・格子番・昼番衆などをしてしている。初見記事以来、城六郎頭盛として見えるが、弘長三年（一二六三）元且から兵衛尉として見える。最後の記事は、吉川本では城六郎左衛門尉である。『関東評定伝』によれば、文永六年（一二六九）四月、左衛門尉藤原頭盛は引付衆に加わっている。文永十一年（一二七四）三月、加賀守に任じ叙爵され、建治元年（一二七五）評定衆。翌年引付衆。弘安元年（一二七八）三月評定衆となり、弘安三年に没する。『尊卑分脈』によると子息の太郎左衛門尉宗頭の母は平政村の娘であり、『北条系図』も同様である。宗頭は弘安八年の霜月騒動で二十一歳のとき誅殺されているから、文永二年（一二六五）頭盛二十一歳のときの子である。

弥九郎長景は『吾妻鏡』では正嘉二年（一二五八）元且から文永三年（一二六六）七月四日まで、計十九ヶ所見え。九郎長景と記した箇所もあるが、正しくは弥九郎長景である。記事のほとんどは供奉関係で、兄たちと同様、廂衆をしてしている。『関東評定伝』によると、弘安元年（一二七八）十一月、左衛門尉藤原長景が引付衆に加わり、同二年三月美濃守に任じている。『尊卑分脈』では長景の子息九郎宗長の母は信乃判官行忠の娘とある。長景は評定衆二階堂行忠（法名行一）の娘を妻としていたのである。『公衡公記』弘安六年（一二八三）七月一日条では、城美濃守長景は二階堂信濃判官入道行一俗名行忠の智だとある。長景に歌集『美濃前司長景集』のあることはよく知られている。

『吾妻鏡』には弘安元年（一二六一）元且から十月四日までの間に計五ヶ所、城十郎時景の名がみえる。初見の年

安達泰盛とその兄弟(川添)

始記事以外はすべて供奉人としての記事である。『尊卑分脈』には十郎判官として従五下 使 左衛門尉」と記している。『関東評定伝』によると、弘安五年(一二八二)十一月、左衛門少尉時景が引付衆になっており、弘安七年四月、泰盛と同様、時宗の卒去にともない出家している。法名は智玄という。弘安八年の霜月騒動で誅殺されている。『吾妻鏡』建長二年(一二五〇)七月十八日条は、秋田城介義景の男子出生を記しているが、年齢的には十郎時景がもっとも近い。かりにそうだとすると、弘安八年三十六歳で没したことになる。

多賀宗隼氏は『鎌倉時代の思想と文化』(二五三頁)で、「報恩院入壇資」「統伝灯広録」を引き、醍醐三宝院の弘義阿闍梨が義景の息だという所伝を紹介し、正嘉元年(一二五七)二十七歳とあり、泰盛と同年であるから、その異母兄弟であろう、としている。

以上、安達泰盛の前半生及びその兄弟の事績を述べてきた。安達氏の兄弟中には頼景・時盛のような、惣領泰盛に対する反対的・批判的分子を含み、その族的結合は必ずしも一枚岩ではなかった。前述したように、泰盛はかなり強いな族的統制を行なったようである。北条氏得宗・北条氏一門・有力御家人等との婚姻関係の結成もこのことと不離であろう。泰盛を始めとする安達氏一門の真言宗一高野山信仰もこの面から改めて見直されなければなるまい。⁽¹⁷⁾霜月騒動は安達氏の族的結合と政治的緊張にかかわる族内外の諸問題を敗滅の相において開示した。それに至る経緯は追って検討していきたい。

〔註〕

- (1) 『尊卑分脈』(刊本・第二篇二八八頁)に義景の女に配し「平貞時朝臣母、号潮音院尼」と記している。
- (2) 安達盛長については、新田英治「安達盛長」(佐藤進一編『日本人物史大系』第二卷中世、一九五九年九月、朝倉書店)、

八幡義信「鎌倉幕政における安達盛長の史的評価」(『神奈川県立博物館研究報告』一卷三号、一九七〇年三月)等の專論がある。

(3) 今村義孝「出羽国司の性格―秋田城介の場合―」(『秋大史学』創刊号、一九五二年三月)は古代を中心にしてはいるが、安達氏の秋田城介の理解に参考になる。

(4) 佐藤進一「増訂鎌倉幕府守護制度の研究」、一九七一年六月、東京大学出版会)。

(5) 御家人と法曹吏僚とは互いに相即しており、簡単に区別することはむづかしいがかりに、小笠原氏・宇都宮氏などは前者、武藤氏・二階堂氏は後者としておく。

(6) 以下「吾妻鏡」所見の安達氏については「吾妻鏡人名索引」(一九七一年三月、吉川弘文館)を参看。

(7) 『帝王編年記』同日条は安達泰盛を義景の長子とし、頼景を泰盛の舍弟とするが、本文に述べているように頼景は泰盛の兄(庶兄か)である。泰盛が安達氏の惣領であったところからきた誤解であろうか。

(8) 以後については別稿に述べる。安達泰盛については鎌倉後期―得宗専制を扱った論著は例外なく論及しているが、多賀宗準『鎌倉時代の政治と文化』(一九四一年一〇月、目黒書店)、佐藤進一「鎌倉幕府政治の専制化について」(竹内理三編『日本封建制成立の研究』一九五五年二月、吉川弘文館)、石井進「霜月騒動おぼえがき」(『神奈川県史だより』一九七三年三月)、網野善彦『蒙古襲来』(一九七四年九月、小学館)、武井尚「安達泰盛の政治的立場」(『埼玉民衆史研究』創刊号、一九七五年四月)、新田英治「鎌倉後期の政治過程」(岩波講座日本歴史6中世2、一九七五年一月)、渡辺晴美「得宗専制体制の成立過程」(『政治経済史学』一二五・一三九・一六二号、一九七六年七月〜七九年一月)、奥富敬之「鎌倉北条氏の基礎的研究」(一九八〇年一月、吉川弘文館)等は必読の文献である。さらに、文化史的側面からの次のような研究も見逃せない。藤原猶雪『日本仏教史研究』(一九三八年七月、大東出版社)、水原堯栄「世尊寺経朝と安達泰盛との関係及び町石率都婆文字の筆者」(『積翠先生華甲寿記念論纂』、一九四二年)、山岸徳平「藤原泰盛の出版及び春日版の摺経」(岩波書店・日本古典文学大系月報31、一九五九年一月)、愛甲昇寛「高野山町石の研究」(高野山大学内密教文化研究所、一九七三年二月)、山西明「真名本『曾我物語』と安達氏」(東京教育大学中世文学談話会編『和歌と中世文学』(峯村文人先生退官記念論集)、一九七七年三月)、後藤紀彦「沙汰未練書の奥書とその伝来」(『年報中世史研究』二、一九七七年五月)、福田晃「『曾我物語』覚え書き」(『立命館文学』四〇三・四〇四・四〇五号、一九七九年三月)。田中稔「秋田城介時頼施入の法華寺一切経について」(『大和文化研究』五一六、一九六〇年六月)も参考となる。なお、吉川弘文館『国史大

安達泰盛とその兄弟(川添)

安達泰盛とその兄弟（川添）

- 辞典』1（一九七九年三月）に安達氏関係項目がある。
- (9) 多賀宗半『鎌倉時代の思想と文化』二四八頁、一九四六年一〇月、目黒書店。
- (10) 「小笠原三家系図」（『統群書類従』五下二二三頁）は小笠原時長の女子に「秋田城介泰盛妻」としている。
- (11) 信濃教育会『建武中興を中心とした信濃勤皇史攷』一一七頁以下、一九三九年一月。塚田正朋『長野県の歴史』八三頁、一九七四年五月、山川出版社。
- (12) 『関東往還記』弘長二年（一二六二）六月廿日条に「故奥州禪門後家少納言左近大夫藤原時盛の妻が北条重時の女であったことが知られる。
- (13) 安達時盛は詠歌にすぐれており、「弘長元年七月七日將軍宗尊親王家百五十番歌合」（古典文庫一四七冊）に左衛門権少尉藤原時盛の歌十首がみえる。図書寮蔵十一冊本八代集（後拾遺集）の下巻奥書に「此北海道法師城四郎左衛門入道依夢想之告進先人文書等内也」とあり、歌書の収集につとめていたことが知られる（松田武夫『勅撰和歌集の研究』二五七頁、一九四四年一月、日本電報通信社出版部）。なお、「為兼卿家集補遺」（『統々群書類従』十四一六二八頁）に「道洪法師すすめ侍ける十首歌の中に」という詞書をもつ和歌が収められている。勅撰集への入集歌数は詠歌にすぐれた安達氏の中でも次のようにもっとも多い。「統古今集」（頼景一）「統拾遺集」（頼景一、道洪四、長景二、時景一）「新後撰集」（道洪一）「玉葉集」（義景一、頼景一、道洪一、頼盛二）「統千載集」（頼景一、道洪二、頼盛二）「統後拾遺集」（道洪三）「新千載集」（道洪二）「新後拾遺集」（道洪一）、西畑実「武家歌人の系譜」（『大阪植陸女子大学論集』10、一九七二年一月）参看。
- (14) 前注諸史料には道洪とし、『関東評定伝』『天台座主記』慈禪の条では道洪、『外記日記』文永三年（一二六六）七月廿一日条には城四郎左衛門入道道洪とする。
- (15) 「弘長元年七月七日將軍宗尊親王家百五十番歌合」に藤原頼盛（当時十七歳）の歌が十首収められており、勅撰集への入集状況は(13)のとおりである。
- (16) 『隣女和歌集』（『群書類従』九一四四八頁）に「長景すすめ侍し哥の中に同題」という詞書をもつ歌が収められている。
- (17) 『東厳安禪師行実』（『統群書類従』九上三三三頁）に「奥州禪門命執事玉村、於和賀江上建居之、山号福光 寺号聖海、師住教蔵」とあり、安達泰盛が執事玉村に命じ鎌倉の和賀江に聖海寺を建てて東厳慈安を住持としたことが記されている。玉村が安達泰盛の執事であることは「蒙古親来絵詞」詞八・詞十四によっても知られる。泰盛は臨濟禪に対しても外護を加えているのであるが、その信仰の中心が真言宗一高野山信仰にあったことは、すでに先学によって明らかにされているとおりである。